

藤原俊成の和歌批評における評価表現に関する考察
～『古来風躰抄』『六百番歌合』を対象として～

教科・領域教育学専攻
言語系（国語）コース
M10121G 中谷 邦子

1 目的

藤原俊成は院政期初期の歌壇を牽引した歌人である。『千載和歌集』の撰者であり、『新古今和歌集』撰定のためにも指導力を発揮していた。数多くの歌合の判詞を務め、和歌批評において強い発言力を持っていた。また俊成は実作者としても『新古今和歌集』に72首も入首を果たしている。批評と実作の両面に多大な実績を残した俊成が、和歌批評においてどのような評価表現をしていたのか。またどのような歌を良い歌として評価したのか、ということをはっきりさせるために考察を行った。

『古来風躰抄』は俊成が最晩年に著した歌論書である。式子内親王と思われる貴人の「よい歌とはどのようなものか」という問いに答えるために秀歌を撰じて所々左注をつけており、そこに俊成の歌観があらわれている。俊成が最終的に到達していた歌観を最もまとまりのある形で示していると考えられ、俊成の和歌批評について考察する上では最適の対象資料である。

また、『六百番歌合』は『古来風躰抄』の約四年前に成立している。千二百首の歌に対して六百の判詞があり、用例数として豊富である。

『古来風躰抄』時の俊成の考えに最も近く、質量ともに具体的内容の考察にはふさわしいので対象資料とした。

2 論文の構成

第一章 『古来風躰抄』

第一節 左注の概要

第二節 俊成の「詞」「心」「姿」

第三節 「めでたし」について

第四節 「をかし」について

第五節 『古来風躰抄』左注における

「ありがたし」の表現内容

第六節 「めでたし」「をかし」

「ありがたし」の様相

第二章 『六百番歌合』

第一節 評価表現の概要

第二節 『六百番歌合』の「をかし」について

第三節 「優なり」について

第三章 『古来風躰抄』『六百番歌合』に

見られる俊成の評価表現

3 論文の概要

第一章

『古来風躰抄』の左注の概要から、各勅撰和歌集に対する俊成の認識を明らかにした。歌集は『古今和歌集』、歌人は貫之・業平・人麿を最良の手本と考えていた。また、左注の評価表現としては「めでたし」「をかし」「ありがたし」の用例が多く、いずれも高い評価で用いていた。

俊成は歌の要素を「詞」「心」「姿」ととらえ、「詞」は伝統的な美を担うものを選ぶように説く。「心」は歌の感動や着想をあらわすほか、詠作の意図をさすことが多い。それは俊成が鑑賞者の立場での詠作を意識していたからで

ある。「姿」は「詞」を選び「心」の感動を詠むことを本質と考えて、美しいものになるよう構想を練るべきだと説いている。「詞」「心」「姿」はつながりが深く、切り離して考えるべきものではないと述べている。

「めでたし」は「心」「詞」をほめながら最終的には「姿」をほめている。「ありがたし」は「心」をほめながら「姿」をほめている。「をかし」は「姿」をほめながら「詞」「心」もほめていた。したがって三語は統一的に歌の「姿」と通じていて、連想性・虚構性・物語性を持った重層な「姿」に美を見出していた。高い評価を受ける根底にはいずれも品格が備わっており、俊成は上品・優雅な美を求めていた。

第二章

『六百番歌合』には多くの評価表現が見られる。肯定的な評価表現で突出して使用が多いのは、「よろし」「優なり」「をかし」であった。

「をかし」を分析すると、『古来風躰抄』の場合と同じで「詞」や「心」に着目しながら結果的に「姿」をほめている。多数ではないが特徴的であるのは、「…と言ふ」「Aと言ひBと言ふ」などの型で「詞」の使い方に着目している点である。「詞」を使う意図、すなわち「心」の働きによって、歌の「姿」の良さが効果的に高まることを述べている。

多数の使用が見られた「優なり」は「優」と「憂」の二義性を持っていた。「優なり」評を恋部と四季部に分類すると、恋部の歌は歌中に「あはれ」「思ひ侘ぶ」といった語を配し、女が恋に憂う姿を詠むものが多く、それに対して「優なり」評をつけているので、「憂」系統の心情を評価しているといえる。一方で憂う女つつましいしぐさを優雅と思い、「優なり」と言う。四季部の歌は伝統的なものの持つ美や祝

言性のある歌を「優なり」と評している。この場合は上品・優雅といった「優」系統の様子を評価した場合が多く、「憂」系統の意味合いはほとんど見られない。また、哀感ではないが「白」「冷」の印象を放つ歌があり、「優なり」は多様な美を示している。

『古来風躰抄』では使用が多かった「めでたし」は『六百番歌合』では用例が全く見られない。「優なり」の評価内容は「優」系統の意味合いで「めでたし」と重なっているので「優なり」が「めでたし」の意味を担っていると考えられる。「めでたし」は主観的に心惹かれるさまをいう。客観性が求められた判詞においては、「めでたし」は使用を控えたと思われる。

第三章

「優なり」に二義性がある「優」と「憂」が歌に混在するのは、対極に見えるものに美を見出す中世的な思考の表れと考えられる。対極と見えながら引き合い、互いの美を引き立てるといった考え方は「わび」「さび」にも通じるものがある。

「優なり」の二義性は歌に複雑な「姿」を醸し出す。俊成が求めた重層性のある歌の美しさを評価する詞のひとつである。複合的という意味では幽玄とつながる部分もある。

4 今後の課題

俊成が高く評価した歌は、余情美があると認められるものが多い。歌の余情はどのような詞からうみだされるのかということ、歌の「詞」そのもの、特に助詞・助動詞を対象に考察することが、今後の課題である。

主任指導教員 田中雅和

指導教員 田中雅和